

## 老年学者の視点からみた第三の居場所としての「サラ文」

澤岡 詩野

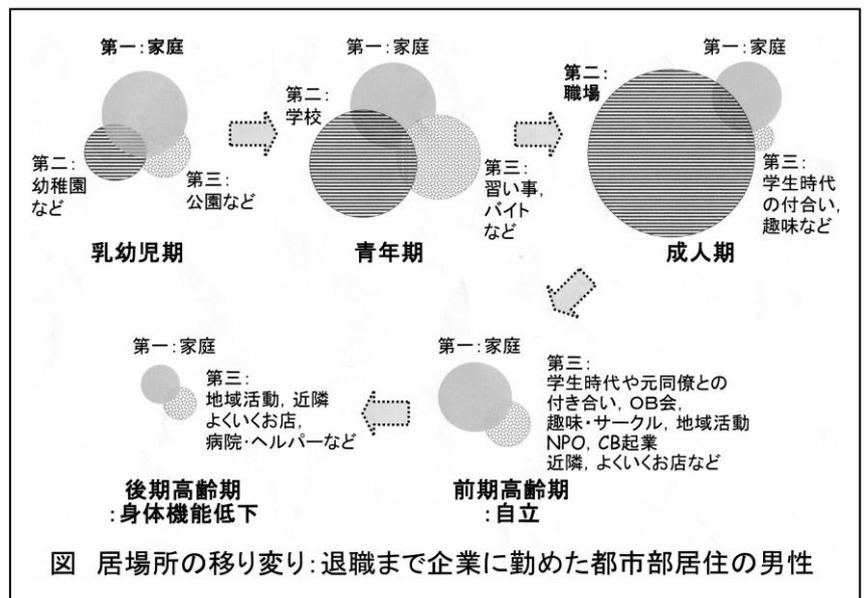
アメリカのコーヒーチェーン スターバックスの創業に影響を与えた「家庭（第一）」「職場や学校（第二）」という生活上必要不可欠な 2 つの居場所に続く、居心地のよさを感じる「第三の居場所（Third place）」の概念。これを提唱したのはアメリカの社会学者 Ray Oldenburg で、居心地のよさを感じる「第三の居場所」の存在が都市の魅力や魅力を左右することを指摘しています。

80 年を超える長い人生において、三つの居場所の比重は絶えず変化しています。定年退職した企業戦士達が「濡れ落ち葉」などと揶揄されるのは、20～60 代までの 40 年間で職場（第二）が主要な位置を占め、定年退職後に気がつけば、第三の円はほとんどなく、第一の円（家庭：配偶者）に存在するしかないことによります。楽しみややりがいに満ちたセカンドライフをプロデュースし、より良い配偶者との関係を維持するためには、第三の居場所を持っていることが必要不可欠といえます。

しかし、定年退職をしてみたはいいものの、「したい」何かが見つからず（青年期の夢を思い出せず）、長い一日をもてあます方の多いのが現実です。理想は、中年期・壮年期から、職場以外の居場所を創り上げておくことですが、残業や休日出勤をすることが暗によしとされる日本社会では難しいのが現状です。

サクセスフルエイジング（幸福な老い）の在り方を模索するなかで、中年期・壮年期からの居場所創りは不可能なのか……等と結論を出しかけた時に出会ったのがサラリーマン文化芸術振興会でした。真面目に遊ぶことに取り組む、多様な人々が集う姿は衝撃的でした。特に、忙しい仕事を調整しても会の催しに参加される現役世代の姿には、新しい価値観が生まれつつあることを予感させるものでした。

サラ文という「居場所」との出会いから 6～7 年が経過し、職場に依存しない生き方を模索する人々も増えてきたように感じます。同時に無縁社会や孤立死などが問題視されるなかで、人と人のゆるやかなつながりの重要性が見直されています。大きな価値観の変換期にある今、サラ文が、改めて第三の居場所創りのパイオニアとして 20 年間培ってきた知識や経験を発信する時期なのではないかと感じています。



(編集部註：筆者は現在ダイヤ高齢社会研究財団で“老年学”を研究テーマとしている)